氏　　名	岩瀬　貴子
学位の種類	博士(看護学)
報告番号	甲第 46 号
学位記番号	看博第 7 号
学位授与年月日	平成 26 年 3 月 19 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論文題目	安心の尺度開発に関する研究 Development of the An-shin Scale for Japanese
論文審査委員	主査　教授　野嶋　佐由美(高知県立大学) 副査　教授　荻沼　一男　(高知県立大学) 教授　長戸　和子　(高知県立大学) 教授　時長　美希　(高知県立大学)

論文内容の要旨

安心は自明的に用いられている言語であり、その具体的な定義は不明確である。本研究の目的は、安心の概念と、その概念の構造を明らかにし、安心の尺度を開発することである。研究デザインは、相関関係的研究である。一般社会人 1,000 名と大学生 1,260 名に対し、概念分析を基に作成した安心尺度 102 項目、併存妥当性用 1 尺度（主観的幸福感尺度）予測関連妥当性用 2 尺度（家族サポート尺度、精神的回復力尺度）、対象者の属性（年齢、性別、同居家族、ストレス等）について、横断的調査を郵送法にて実施した。なお本調査は、予備調査による内容妥当性、表面妥当性、信頼性の検討を行い、尺度を洗練化し実施した。分析方法は、安心尺度項目分析：I-T 分析（尺度総得点と下位項目）、信頼性検討：クロンバックα係数、妥当性検討：探索的因子分析、確証的因子分析、基準関連妥当性：基準関連妥当性用 3 尺度の因子得点と、尺度の合計得点との相関係数を算出した。比較検討では、t 検定、一元配置分散分析（多重比較 Tukey 法）、関連検討では、Pearson 積率相関係数、コレスポンデンス分析、重回帰分析を行った。

回収された質問紙は、一般社会人 426 部（回収率 43%）有効回答 421 部（有効回答率 99%）、大学生 530 部（回収率 42%）有効回答 527 名（有効回答率 99%）であった。分析の結果、安心尺度は、逆転項目を削除し、探索的因子分析と確証的因子分析の適合度を比較検討した結果、概念分析を基にした理論的な 8 因子構造の適合度が良かった。因子名は、おだやかである、不安・苦痛が少ない、楽観的志向である、自分を肯定している、自分に自信がある、自分で安心できる能力がある、対人関係の確かさがある、社会とつながっていると命名した。また、安心尺度因子得点と、併存妥当性用 1 尺度、予測関連妥当性用 2 尺度の 3 尺度間には、有意な正の相関があり、安心尺度の妥当性は得られた。安心尺度は、性別や、社会人と大学生、同居者の有無に関係なく評価が可能であったため、幅広い年齢層にも対応が可能である。社会人の安心認識は、将来に対する見通しの明るさであり、家族との関係が良く、自分の人生を前向きに受け入れ、何かあっても解決できる自分の力を信じていることであった。大学生の安心認識は、ストレスなどで動揺しても自分を落ち着かせることができ、粘り強く様々なことに興味を持って取り組むことができ、自分の将来に希望を持ち、困ったときには支えになる家族がいることであった。本研究では、安心が「状態」を示す概念から、その人の「能力」そして「社会との関係のなかで獲得・育成」されるという能動的で広い視野を含め

た概念であることが提案できた。人は、ストレス状況下に陥ると、不安や脅威に脅かされ、安心できるように様々な行動をとる。それは、危機に対する生きるための本能でもあり、また自己防衛の姿でもある。また、安心は能動的な思考や行動であり、その人が発達の過程で獲得した安心できる能力や、自己受容が必要であり、対人関係や社会とのつながりのなかで得た感覚が必要となることが示唆された。

審査結果の要旨

「安心の尺度開発に関する研究」の特徴は、安心の概念分析に基づき、安心を測定する尺度を開発したことである。

本研究の特徴は、安心という看護にとって重要なコア概念であり、日常的に使用している概念を測定する測定用具を開発したところである。また、東日本大震災は、我々一人一人に、日本社会の安全と安心の思想を再吟味することを求めてもきた。このような時期に岩瀬史は果敢に安心を測定する測定用具を開発したのである。第二の特徴は、安心を国内外の文献を読み解き概念分析をし、プレテスト等を繰り返し、本調査の前に慎重で丁寧な吟味を行い、属性を特定化したうえで、本調査に臨んだことである。その結果、理論的な背景から導いた属性が統計的手法によっても確認されたことである。すなわち、本研究の土台は、概念分析の結果をもとに、試行錯誤を重ね項目選定を行い、再度文献に戻り、概念分析の内容を洗練するという丁寧な循環の過程を経たことである。その後、プレテストを重ねつつ、本調査を開始した。

開発された測定道具は、【おだやかである】【不安・苦痛が少ない】【楽観的志向である】【自分を肯定している】【自分に自信がある】【自分で安心できる能力がある】【対人関係の確かさがある】【社会とつながっている】の８つのサブスケールからなる。内的一貫性信頼性、因子分析による構成概念妥当性、主観的幸福感尺度を用いての併存妥当性、精神的回復力尺度と家族サポート尺度を用いた予測関連妥当性が確認された。

本研究の成果は、安心は‘自己’‘対人’‘社会’に対する‘状態’であり、‘能力’であることを示唆している。

日常生活のなかでは、状態として論じられる傾向にあるが、その状態は、自己、対人関係、そして社会との関係のなかで獲得されていくことを示していることは画期的であり、そのような視点を含んだ測定道具が開発されたことは意義深い。精神力動や自我発達論の視点からすると、安心もまたその人の成長とともに獲得できるような対人的な環境や社会環境を整えていくことの重要性を示唆している。また、安心は状態であり、その状態に至り支えるためには、一定の能力が必要であることを示唆している。したがって、社会としては、安心できる環境の提供とともに、安心する能力を育成することも重要な取り組みとなることを示唆している。以上のように、本研究の成果が看護界に対して重要な事柄を発信している。

結論として、安心を‘自己’‘対人’‘社会’に対する‘状態’であり、‘能力’であると規定したことにより、必然的に、安心についても、「自助」「共助」「公助」が深くかかわっており、それらが統合されてはじめて、人間の安心につながることを示唆している。

以上のことから、本審査委員会は、「安心の尺度開発に関する研究」は学位授与に値する研究論文であり、学位申請者 岩瀬 貴子 氏が、博士（看護学）の学位を授与される資格があるものと認めた。